

三 ギリシア風佛教派、及び中世派

距離も遠く、時代も隔つてゐる、素養に差があり、人種は異つてゐても、要するに、之等の彫刻が語る聲なき言葉を吾人は解し始めたのである。而して適當な方面から之を觀察したと信ずる。期待した圖がどういふ風に現はれてゐたか、其場面が豫想した様な具合に出來てゐたか、又、其題材の發達が豫測した様な方向に、まさしくどう進んでゐるかどうかは上述の點から判ると思ふ。然し全體に於て、之だけの事は考へておかねばならない。古代派の後代の發達も、其の初頭は、佛教の靈場にあつた記念品製作者の手に依つて、工業的で同時に宗教的に造り出された事を常に忘れぬ様にせねばならぬ。此の古代派は其出發點を過つてゐた爲に、習俗に依らざるを得ず、あらゆる構圖の中心に現はすべきであつた人物たる、世尊の表現を失つたのである。已に知らるゝ如く、印度では、習俗が忽ちに力強く法則となつて了ふのは、殊に考へられる點である。従つて此の派がこの不思議な制限を守つてゐたのも